The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	菊人形における見立て
Author(s)	川井, ゆう
Citation	デザイン理論. 1994, 33, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

菊人形における見立て

川井ゆう／武庫川女子大学大学院博士後期課程学生

はじめに

菊人形は，菊をそのまま衣裳として着用した等身大の人形として見ることができる。花そのものが衣裳に利用されるというのは，他に例を見ない（一時的には菊人形に影響を受けたつつじ人形などが存在した）。

植物としての「菊」自身に注目すると，菊人形の成立以前の菊と人とのかかわりは独自の変化を遂げていることがわかる。菊が中国から日本に伝えられて以来，菊の意味は常に重層的に堆積してきたのである。

本報告ではまず菊人形が現れるまでの菊の意味の変化を追った。その上で娯楽としての菊人形の成立や変貌の過程を考察した。

菊人形前史

菊が不老不死の薬として中国から日本に伝わり，菊が「キク」という名前と共に認識されたのは仁徳天皇の頃である。以来中国に倣って重陽の宴を催すようになる。菊を穀物に混ぜて醸造したものを霊酒として重陽の宴に飲んだ。菊はまず「飲んで効く」という役割を持って日本に伝えられたのだった。

11世紀頃，重陽節に菊綿を贈る習慣が生まれる。前日に真綿で菊花を覆って菊の香を移し，翌朝露に濡れたその綿で身体を拭うと老が去り，長寿が保たれるというものである。菊は体内に摂取しなくても，身体を拭うだけで効果があるというように解釈された。菊の不老不死の意味が日本人の間で大きくなったのだろう。菊は「匂って，触れて効く」という役割をさらに持つにいたった。

それまでは菊を身体に接触させなければ不老不死の効果がなかった。12世紀になると，菊はその文様を身につけるだけでも効果があるというように理解される。ホンモノの菊でなくてもよくなるのだ。また，重陽節という季節性もなくなり，衣裳や鏡に柄を描き，それを身につけているだけで不老不死にあやかれるというように変化する。この時期貴族の間で菊が盛んに意匠化し，菊の霊力はますます力をもっていく。「描いて効く」菊の登場である。

菊が栽培植物として庶民に普及するのは江戸時代を迎えてからである。多くの栽培書が出され，菊の品種改良が盛んとなる。菊人形へと発展する上で直接影響するのがこの品種改良だった。菊は品種改良が容易である。観賞用の花として栽培されていた菊に対して，菊そのものの美を作り上げるというよりも，どれだけ〈変形〉できるかということに熱意が注がれるようになる。

菊は不老不死の意味を担って中国から伝来し，その意味を日本人が重んじたからこそ庶民の栽培技術の向上にまでつながった。その菊の変形が他の植物に比べて容易であったことが重なって，菊人形へと発展するのである。

菊の伝来から菊人形へと発展しても，菊の場合，それまでの意味は失われない。これを菊の意味の重層的堆積と呼んでいる。例えば重陽節に菊花酒を飲む習慣は現在でも存在する。菊の文様は現在でも様々に創られているし，菊栽培は当時から今日に至るまで依然として盛んである。

菊人形史 ── 見立ての誕生

最初の菊人形は人形というよりも細工であった。文化年間（1804-18）には一本の菊の枝葉を広げて孔雀を作ったり，鉢植えの菊をたくさん使って富士山になぞらえたりした。

菊細工が現れたことで，菊栽培に新しい観賞方法が成立したことになる。菊の〈変形〉まではあくまで菊花として見られていた。菊細工が菊以外のものを菊で表すようになって，「見立て」が登場するのである。菊の集まりをたとえば富士山に見立てるという観賞方法である。

ひとたび菊を別のものになぞらえるというやり方が普及すると，様々な工夫が施され，菊細工は多様な形を作り上げる。こうして菊細工は天保15（1844）年頃から菊人形となる。これまでの植木屋や素人の作品から，人形師と植木屋の専門的な共同作業となり，人間を模するようになる。

菊人形が専門的になっていくには，当時盛んに作られていた見世物の人形細工の影響がある。もともとは奉納細工として作られたものが，やがて専門的となり，入場料をとるようになって見世物となる。この経緯は菊人形にもあてはまる。菊人形が天保15年に現れたのは，江戸巣鴨の霊感院における奉納細工としてだった。

菊細工が盛んに作られるいっぽうで，菊人形は民間伝承や宗教上の事績を主題とした。やがて見世物だけではなく，当時の娯楽にも菊人形は影響を受けるようになった。歌舞伎や浄瑠璃のテーマを取り上げ，その舞台の役者に人形を似せるのである。菊人形はそれまでの見方とは異なり，見る人は菊人形以外の様々な知識を必要とした。菊人形が変化するにしたがって，見方も複雑化するのである。

見方が複雑化するのは菊人形に限らず，当時の娯楽では一般的なことだった。歌舞伎自身がそうである。ひとつの「見得」がたとえば正月のお飾りに見立てられ，お飾りの海老が実は役者の海老蔵の名にちなんでいるという具合いである。その場面を菊人形で表すとさらに複雑になり，見る人はその複雑さの読み解きを楽しんだ。見立て絵についてもこのような複雑さがあり，当時の娯楽の一つだった。

菊人形は明治8（1875）年に見世物興行化した。民間伝承や宗教上の事績，それに歌舞伎に取題しながら，菊人形はその時々に話題となったものを取り入れていく。戦争の菊人形があり，芸妓や美人の菊人形があり，連載小説や映画もすべて菊人形になった。これらでもまた見立ては複雑化され，見る人を楽しませた。

しかし戦後になって，人々の洋装化がすすむにつれ，和装の表現にのみ適した菊人形はテーマに窮するようになる。複雑な見立ても見る人には難解になってくる。1963年から始まった大河ドラマに救われて現在にまで至っているが，後継者問題は深刻である。それでも菊人形は現在でも全国各地で盛んに行われ，新たに菊人形を展示する所も少なくない。

菊の文様化ということ ── 菊人形への第一歩

菊人形を考えるとき，以上述べたように菊と人とのかかわりの歴史を振り返ることでその成立を説明することができる。菊人形がまだ出現の兆しを見せてさえいなかった12世紀，すでに〈なぞらえる〉行為は始まっていたのだ。文様化された菊が不老不死の意味を担っていた。描かれた菊に，菊本来の意味を与えるというこの発想の展開こそ，後の菊人形の誕生に通じるものがあった。菊人形が桜人形でもなく梅人形でもなかったという背景には，この菊という花の歴史が存在するのである。